二〇二一年度 東京藝術大学 音楽学部 入学試験 (問題・解答) 用紙
実施日時: 二〇二一年二月二十六日 (金) 九時三〇分～十一時三〇分 (二時間〇〇分)

科 目	学 科 名	受験生記入欄 受験番号	(ア)	(イ)
国 語 七枚のうち一枚目	楽 理 科			

第一問 次の文章は、小森陽一「(読む)ことへの夢想」(『文体としての物語』所収、昭和六十三年四月、筑摩書房)の一部です。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

※ 解答は解答欄におさまるように記述すること。

この部分につきましては、著作権法上の関係から掲載することができません。

二〇二一年度 東京藝術大学 音楽学部 入学試験 (問題・解答) 用紙
実施日時: 二〇二一年二月二十六日 (金) 九時三〇分～十一時三〇分 (二時間〇〇分)

科 目	学 科 名	受験生記入欄 受験番号 番	(ア)	(イ)
国 語	楽 理 科			
七枚のうち二枚目				

この部分につきましては、著作権法上の関係から掲載することができません。

科 目	学 科 名	受験生記入欄	(ア)	(イ)
国 語	楽 理 科	受験番号		
七枚のうち三枚目		番		

この部分につきましては、著作権法上の関係から掲載することができません。

問一 文中のカタカナ(ア)〜(オ)を、文意に合うように適切な漢字になおしなさい。

問二 括弧内に書かれている文中の三つの波線部、「家の建て替えて縁側は無くなったという」「もちろんいつも晴れていたわけではないのだろうが」「それもまたいつも同じにおいがただよっていたわけではないのだろうが」について、わざわざこうした括弧書きがなされているのはなぜか、説明しなさい。

問三 文中の傍線部(1)「記憶は何よりも、「意識」として顕在化し作動している脳の領域よりも、「身体」として潜在している脳の領域に、より多くの意味生産性の可能性を孕みながら存在している」とはどういうことか、文意に即して説明しなさい。

問四 文中の傍線部(2)「あるテキストをめぐる、最も深い感動」について、筆者の考える読書の本来的意義をまとめる形で説明しなさい。

問五 文中の太線部「いわば書物の流通過程そのものが、「読書する身体」を解体しつつある」とあるが、問題文において論じられているのは、昭和六十三年(一九八八)当時における「解体」の様子です。

そこで、二〇二一年現在における「書物の流通過程」と「読書する身体」の関係性について論述しなさい。

科 七枚のうち四枚目	科目名 楽理科	受験生記入欄 受験番号	(ア)	(イ)
---------------	------------	----------------	-----	-----

第二問 次の文章は、『落窪物語』の一節です。中納言の娘で、皇族の出である実母と死別した落窪の姫君は、貴族の娘として恥ずかしくない容姿に育ちながらも、継母(北の方)のいじめを受けながら日々を過ごしています。北の方には、四人の娘(上の娘二人は既に婿を取っており、三女が文中の「三の君」)があり、また息子たちもいます(三男が文中の「三郎君」)。
 これを読んで、以下の問いに答えなさい。

やうやう物思ひ知るままに、世の中のあはれに心憂きをのみ思されければ、かくのみぞうち嘆く。

(A) 日にそへてうさのみまさる世の中に心つくしの身をいかにせむと言ひて、いたう物思ひ知りたるさまにて。おほかたの(ア)心ざま聡くて、琴なども習はず人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。母君の、六つ七つばかりにておはしけるに、習はし置いたまひけるままに、箏の琴を世にをかくく弾きたまひければ、当腹の三郎君、十ばかりなるに、「琴(イ)心にいれたり」とて、「これに習はせ」と北の方のたまへば、時々教ふ。

(ウ) つくづくと暇のあるままに、物縫ふことを習ひければ、いとをかしげに(エ)ひねり縫ひたまひければ、「いとよかめり。(一)ことなるかほかたちなき人は、物まめやかに習ひたるぞよき」とて二人の婿の装束、いささかなるひまなく、かきあひ縫はせたまへば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寝も寝ず縫はす。いささかおそき時は、「かばかりのことをだに、ものうげにしたまふは、何を役にせむとならむ」と責めたまへば、嘆きて、「いかでなほ消えうせぬるわざもがな」と嘆く。

(2) 三の君に御装着せたまつりたまひて、やがて蔵人の少将あはせたまつりたまひて、いたはりたまふこと限りなし。落窪の君、まして暇なく、苦しきことまさる。(3) 若くめでたき人は、多くかやうのまめわざする人や少なかりけむ、あなづりやすくて、いとわびしければ、うち泣きて縫ふままに、

(B) 世の中にかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり

〔語注〕

○琴—「琴なども習はず人あらば」の「琴」は、七弦の「琴の琴」で、柱がなく習得の難度が高かった。「箏の琴」は十三弦の琴で、「琴心にいれたり」も同様。○当腹—正妻から生まれた子。○御装着せ—貴族の女子が成長して、初めて装を着ける「装束の式」。

二〇二一年度 東京藝術大学 音楽学部 入学試験 (問題・解答) 用紙
 実施日時: 二〇二一年二月二十六日 (金) 九時三〇分～十一時三〇分 (二時間〇〇分)

科 目	学 科 名	受験生記入欄	(ア)	(イ)
国 語	楽 理 科	受験番号		
七枚のうち五枚目		番		

問一 文中の傍線部(ア)「心さま聴くて」、(イ)「心にいれたり」、(ウ)「つくづく」と、(エ)「ひねり縫ひ」、を現代語に訳しなさい。

問二 文中の傍線部(1)「ことなるかほかたちなき人は、物まめやかに習ひたるぞよき」について、

①発話者を明らかにした上で、わかりやすい現代語に訳しなさい。

②この発言にこめられた発話者の意図について説明しなさい。

問三 文中の傍線部(2)「三の君に御装着せたまつりたまひて、やがて蔵人の少将あはせたまつりたまひて、いははりたまふこと限りなし」について、主語を明らかにした上で、わかりやすい現代語に訳しなさい。

問四 文中の傍線部(3)「若くめでたき人は、多くかやうのままわざする人や少なかりけむ、あなづりやすくて」について、「若くめでたき人(若く美しい侍女たち)」の、落窪の君に対する態度とその要因を説明しなさい。

問五 (A)・(B)二つの和歌に共通する、落窪の君の心情について説明しなさい。

二〇二一年度 東京藝術大学 音楽学部 入学試験 (開題・解答) 用紙
 実施日時 二〇二一年二月二十六日 (金) 九時三〇分～十一時三〇分 (二時間〇〇分)

科目 七枚のうち六枚目	学 科 名 楽 理 科	受験生記入欄 受験番号	(ア)	(イ)
----------------	----------------	----------------	-----	-----

第一問

問一 (ア)

(イ)

(ウ)

(エ)

(オ)

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--